

本興寺だより

令和五年
十一月
第二五二号

「法華經の文字は皆生身の佛なり。我らは肉眼なれば文字と見る也。例えば餓鬼は恆河を火と見、人は水と見、天人は甘露と見る。水は一なれども果報にしたがって見るところ各別也」

(宗祖 法蓮鈔)

暑かった夏が過ぎ、秋の風景も瞬く間に通り過ぎ、師走を迎えた感じがします。「**光陰(こういん)矢の如し**」と云われていますが、**光は日、陰は月。月日の過ぎ行く早さを例えています**が、**弓矢も時間も二度と戻りません。それ故毎日を大切に生きよという戒めの意味も含んでいます。**

一年を振り返れば、心の中も**光と影(陰)**を何度か経験します。人との大切な出会いもあれば淋しい別れもあります。自分の生き様で喜びもあれば満たされない心残りや、悔いもあると思います。皆一生懸命生きてきたつもりでも、冷静に過去を見つめ直せば、「あの時こうすれば良かった」と思う事がたくさんあります。

人は、心残りのことや、自分の意に反する結果になったことなどは、何時までも心の底に残りがちで、なかなか気持ちの切り替えが出来ないことがあります。



人は本来どう生きて行けば良いかは漠然と知っていると云われます。他の人と助け合って、皆ともに仲良く生きていきたいと思っています。しかし、そこに好き嫌いの感情や損得の打算が芽生えれば、そうも言っておられず、もめ事や張り合いによって悩みや苦惱を増すと云われます。それが自分の心に知らず知らずの内にほこりや塵となって積もるのです。年末に家の中のすす払いや大掃除をして、一年の汚れを取り除き、新年を迎える準備をしますが、**一番大事なのは、一年に溜った目に見えない心の掃除**です。

不満、不平、心配等の気持ちを除去して、新たな年に新たな気持ちで、お互いに新たな新芽(生命力)を出して支え合って生きていきましょうというのが、「**おめ(芽)でとうございませす**」と交わす新年の挨拶でもあると思います。

仏様は、人間は「**身と口と意(心) 三業**」で善悪の行為を作ると云われます。悩み、苦悩の多くは自分の心から出るこの三業によって引き起こされると云われます。

心(意)に留めて置かれなくなった思いが、口から出て、更に**行動(身)**へと駆り出されるのです。特に言葉(口)でつくる業が大切なのです。師走を控え、気持ちが慌ただしく馳せたのか?最近〇知事も余計な一言を吐いて大きな問題になっています。それを批判している元総理も、何度も自分が失

言したのを忘れたかのようです。人は他人のことははつきり見えても自身のことは見えないのだと、つくづく感じます。「**男はつらいよ**」のフーテンの寅さんは、風来坊の如くあちこちを転々とし、たまたまの帰郷に戸惑った家族が、本心を隠して歓迎を演じていたが、喧嘩の中で誰かが本音を吐き出し、家族の虚構が崩れた時、寅さんが再び旅に出ます。

その時に寅さんが言った言葉が「**それを言っちゃあ、おしまいよ**」。昔見た映画のシーンが思い出されます。人間関係を保つ知恵には口に出さない暗黙の了解も時には必要なのです。

政治家や有名人が失言や暴言を言ってよく問題になりますが、私達も同様です。「それを言っちゃあ、おしまいよ」と言われる言葉を吐いて人を傷つけたら、この言葉を相手から吐かれて自分が傷ついた事がよくあることに気付かないのです。自分も相手も知らず知らずのうちに、この言葉を吐いていることが多いのです。

人生の生き様の根幹は己の心の在り様が握っていると云われます。心の想いが優しい言葉や強い言葉となって相手に伝わるのです。それが不幸を引き寄せる原因ともなると云われます。

人は如何なる時でも、等身大の現在の己を、長所も短所も冷静に見つめて知り、自我の固い殻を破り、心を広く豊かにしていく中で、幸せがつかめるのだと云われます。

不満や寂しさの気持ちがある時は、他人と比較する



からです。それも自分の願望が満たされていると思う人と比較して。人生に比較はいらななのです。辛い時でも、物の見方、考え方、心持ちを変えれば別の視野が開かれ、明るく行く末が見えてくると云われます。

法華經の教えは、**誰もが一度は考える人生の根本的な問いかけに答えた教え**です。「私とは一体何者なのか。なぜ私は生まれたきたのか、何のために生きるのか」なぜ理不尽と思える困難に遭うのか」などです。

仏様の悟りの教えから云えば、人の身体も心も、**自然の摂理(法則)、生命の実相に反する生き方をすれば、困難や苦しみが増えること**になります。

人は、必ず生きる意味と、この世でのなすべき課題をもって生まれてくるのです。

人は、悲しみや苦しみを体験した分だけ、深い喜びと安らぎを得ることが出来ます。また他人の苦悩に寄り添うことが出来ます。

人それぞれの人生は違っても、苦楽は誰もが平等に体験します。自分の体験を通して、お互いに理解し、助け合って生きることが本来の生き方であると説かれています。

嬉しい時には、**陰の支えがあったことに気付**き、辛い時には、**大事な学びの機会なのだと受け留められる心で生きなさいと云われています。**

大晦日には、除夜の鐘を聞いて、煩惱の垢を被い、今年一年の無事を感謝して、新たな年に向かいたいものです。今年も有り難うございました。

合掌
本興寺住職 中 谷 聰 秀